

ほほえみ 第11号

10月・October 収穫の季節です。Octoberというのは不思議ですね。Octというのは、オクトパス(八本足=タコ)というくらいで元々「8」を表すので、昔は(ローマ時代)は8番目の月であったようですが、何故か現在では10月です。2011年も10ヶ月も過ぎたのかと思うと、月日の移り変わりの早さに驚かされます。

植物由来の抗がん剤

以前に、ニュースレター第4号の化学療法の歴史の稿で触れましたが、抗がん剤の世界最初のもは、マスタードガスから派生したアルキル化薬と言われる薬でした。今回は、植物由来の抗がん剤に関してお話したいと思います。

通常、抗がん剤の選抜には、多種多様な化合物の中から、抗腫瘍活性(がん細胞を殺す能力)を持つものを選んできてさらに、それを投与可能な形に作り変えて、前臨床試験(培養細胞や動物実験)などを経た後、ごく一部の有望なものを臨床試験します。実際には臨床応用されるものは臨床試験されるものの中でもごく一部となります。

薬剤の選抜を始める場合には、人の手で人為的に作られたものもありますが、植物や真菌などから抽出した物質も含まれます。今回お話しする、植物由来の抗がん剤も複数あります。古代から、人間にとって植物を擦ったり、煎じたりしたものというのは、最も手近な薬でもありました。経験則に基づく時代では、単一の成分が使われることはありませんが、有機化学が進み、様々な天然物由来の薬剤が得られるようになりました。

代表的な植物由来の抗がん剤には、喜樹から精製されるイリノテカン、タイヘイヨウイチイから精製されるパクリタキセル、ポドフィラムから精製されるエトポシドなどがあります。これの薬剤の構造式を右にお示ししますが、ぱっと見てものすごく構造が複雑です。下に人間が考えて作成した5-FUという薬を比較して示しますが、全然異なることがわかっていただけたと思います。自然界は多様なのです。

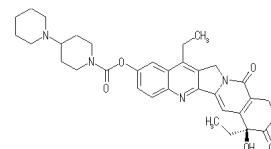
また、イリノテカン、パクリタキセル、エトポシドに共通して言えるのは、抗がん剤の中でも白血球が減りやすい薬であるということと、脱毛が出やすい薬であるということです。各々、構造は異なるのに、白血球減少・脱毛が重なるとは全く以外なことです。

天然物から抗がん剤を選抜するのは、以前の抗がん剤開発の主流でしたが、大変な労力がかかります。最近では生体内で使われる分子の形を研究して、それに適合する形を備えた薬剤をシュミレーションして作成する創薬が、主流となってきています(分子標的治療薬)。

喜樹



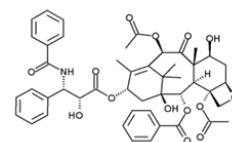
イリノテカン



タイヘイヨウイチイ



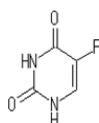
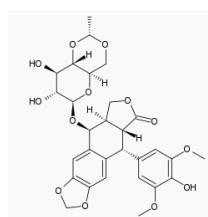
パクリタキセル



ポドフィラム



エトポシド



5-FU
人間が合成した薬

組織とリーダーシップ

人間の組織では、どんな組織でも自然にリーダーが生まれます。組織と言うとフォーマルなものを思い浮かべますが、「芋の子会」をやるにも、「さんさ踊り」をするにも自然発生的にリーダーがいることに気がきます。しかし、リーダーとは何かと言われると、何となくイメージはあるものの、根源的な要素は何か考えてしまいますね。

現在のリーダー像では、リーダーとは必ずしも地位、権力に由来するものではないと考えられています。リーダーシップは習得できるのか否かも議論的ですが、二つの大きな要素があると思われており、一つはビジョンを示す能力であり、もう一つは人間関係調整能力と言われています。日本の首相は一年交代であるのは事実ですし、まるで「回転木馬」だと悪評を蒙っていますが、言い換えれば絶対的なリーダー不足であるということでしょう。特に、ビジョンを示す能力で物足りなさを感じるのは私だけでしょうか。

これが政治家個人の問題なのか、日本全体が抱えている問題なのかは問題の根の深さによるのですが、日本全体が明らかな衰退局面にあるように思えてなりません。日本は東洋か西洋か良くわからない国ですが、東洋的な人格修養を背景とした伝統は大幅に失われています。このままで良いのか、政争や経済に明け暮れて、根底が衰えて言った場合、地理上同じ島の上に住んでいるという以外に日本のアイデンティティは残るのでしょうか。亡国の危機という言葉が真実味を帯びて感じられるこの頃です。

人情馬鹿物語 川口松太郎

以前に、NHKの週間ブックレビューで、作家の吉川潮氏が取り上げておられた本です。ネットで検索したら、2009年の7月放送でした。元々は古い本なのですが、丁度復刻されたタイミングで紹介されていました。大変、味わい深い本です。この頃、村上春樹氏の1Q84が売っていたんですね。家内が読んでいたので、家にも在るはずですが、こちらは私は読んでいません。

さて、この本は、週間ブックレビューを見た後に、すぐ買って読んでみたいと思わせるような、出演者の反応でした。早速、取り寄せたことを記憶していますし、期待を裏切らない本であったと記憶しています。

どっちかという、個人的には普段は手に取ることの少ないジャンルですが、人情の機微が巧みな筆さばきで書き写されていて、出張で出掛けるときなど鞆に忍ばせておくのに良い本に思います(加藤)。



MEMO

10月のがん化学療法科の予定

- | | |
|--------|-----------------------------------|
| 10月10日 | 体育の日 |
| 10月14日 | 新渡戸稲造記念 がん哲学外来 (樋野興夫教授)
柴田教授外来 |
| 10月28日 | 柴田教授外来 |

